

俳句と滑稽について考える（一）

荒井良明

俳句とは滑稽なりと言ひし人

故・山本健吉は「俳句は滑稽なり。俳句は挨拶なり。俳句は即興なり」と看破した。

ここで私は「滑稽」の範囲を広くとって「俳句は滑稽なり」について考えていきたい。思いつくままの雑考なので、学術的まとまりに欠けることについてはあらかじめお赦しをいただきたい。

見られたくないものを句材にして自然な滑稽味

荒川で尿瓶洗えば白鳥来 金子兜太

春蘭けて尿瓶親しと告げわたる 金子兜太

病気のため、服用している薬の副作用で、老齡ゆえに、等で「しびん」を必要とする人もあろう。

川で尿瓶を洗っている人を見たら、私は目を逸らすだろう。それは汚いものを見たくないという意味ではなく、その人が見られたくないだろうと忖度するからである。尿瓶を使うのも人間活動の一環であり、恥ずべきことではない。だが、多く人はそれほど達観できない。しかるに、前掲句は「自虐ネタ」の句ではなく、兜太はこれを胸を張って詠んだ。

兜太のあつけらかんとした、天衣無縫な諧謔は、健康な人の健康な笑いを誘い、また、例えば過活動膀胱に悩む多くの人に勇気を与えるのではないか。兜太の句は人生に裨益する。対馬康子曰く「『しびん』を堂々と句材に押し上げたのは金子兜太である」。

「うんこ」だって

長寿の母うんこのようにわれを産み 金子兜太

昨今『うんこかん字ドリル』が大ヒットであるという。「ちちの日に うんこの絵を 百枚プレゼントした」というような例文で前編埋め尽くされており、イ

ラストもうんこをモチーフにしたものだ。「クスクス笑いながら勉強している」。これを子に買い与えた親からはそんなレビューが多い。

兜太の掲句も、花鳥諷詠派が見たら目を剥くかもしれないが、出産も排泄も動物としての人間の自然な営為だから、特定の言葉をタブー視して排除すべきではない。だが、寡聞にして、掲句以外に「うんこ」の三字の入った佳句を知らない。

尿・しと

暗き夜に小便所をやたづぬらんそこと教へばやがてしと（尿・師と）せよ

先の「尿瓶」に戻るようで恐縮だが、『新撰犬筑波集』よりの引用。暗い夜に小便所のありかを尋ねるという前句に、「しと＝尿」と「師と」の掛詞で、「教えたらそこで放尿せよ」、同時に、ものを教わったのだからその人を「師と」せよ、という意味。

こういう下卑たダジャレ（これは上品な方）に、座のみんながガハハハと笑いあったという歴史があったから、正風（蕉風）が生まれてきたというのも正視すべき事実である。現代俳句に至る歴史は長い。

立小便覚えたる子や山笑ふ 平賀節代

これは、小便という言葉が入っても、品良く子の成長を喜ぶ母の心情を詠むことができるという例。

俳句の長い歴史に学ぼう

百五十歳子規も明治も秋生まれ 良明

子規生誕からでも百五十年。『犬筑波集』からは六百年弱。長い歴史を踏まえて今日を詠んでいかん。

〈謹んで金子兜太師を哀悼す〉